

Delores Boeckmann 研究

— 女性スポーツのパイオニアの足跡をめぐって —

A study on Delores Boeckmann :

The professional career

村山茂代

Shigeyo MURAYAMA

Abstract

The purpose of this study is to investigate the professional career of Delores Boeckmann (1904-1989), a pioneer in women's sports in the USA.

Boeckmann ran the 800 meters in the Ninth Olympic Games in Amsterdam (1928), the first Olympic Games in which woman could participate. After the Games she turned gradually to coaching track and field and then worked as the director of various sports organizations. She was the first woman to have held such positions.

After World War II, Boeckmann came to Japan to work for the US Army Special Service as the Recreation Director of Korea for 16 years. From 1950-1951, she coached the Japanese women's track and field team at the request of General MacArthur. In addition, she taught the theory of physical education, track and field, and recreational sports at Japan Women's College of Physical Education from 1951-1958; although no mention of this work is made in previous studies on Boeckmann in the US. Still such activity most definitely provided nice memories for her students.

Boeckmann was inducted into the National Track and Field Hall of Fame in 1976 and into the Missouri Track and Cross Country Coaches Association Hall of Fame in 1977.

Keywords : *The US Track and Field Hall of Fame, The Armory Foundation, Alice Milliat, "Seiju Nikki", The 1928 Olympics*

I はじめに

日本女子体育大学附属図書館内の二階堂トクヨ資料展示室には「戦後—米国駐留軍将校ミス ベックマンの特別授業」と題する外国人による授業風景の写真が展示されている。写真が撮影された場所は旧松原校舎の学科室であり、受講生は日本女子体育短期大学1956（昭和31）年3月の卒業生である（写真1）。

ベックマン (Delores Halpin Boeckmann, 1904-1989)¹⁾が初めて日本女子体育短期大学の教壇に立ったのは、この写真より数年早い1951（昭和26）年5月8日のことで、その時筆者は短大に入学して間もない1年生であった。外国人から講義を受けることはまだ珍しい時代で、全学生が学科室に集められ、緊張した雰囲気の中でベックマンを迎えた。ベックマンは米国駐留軍の将校と紹介されたが、どのような経歴をもつ

た人物なのかの紹介はなかった。

WEBサイトによれば²⁾、ベックマンはアメリカ女性スポーツのパイオニアであって人見絹枝（1907-1931、



(写真1) 二階堂トクヨ資料展示室の展示写真
日本女子体育大学所蔵

日本女子体育短期大学（卒業生）

二階堂体操塾1925年卒)とほぼ同世代, しかも第9回オリンピック アムステルダム大会で800メートル走を走った選手であった。また, ベックマンは戦後アメリカの駐留軍兵士にレクリエーションを提供する韓国の監督官 (US Army Special Service as a Recreation Director of Korea) の職位で来日し, 連合国軍司令官ダグラス マッカーサー (Douglas MacArthur, 1880-1964) の要請により日本女子代表選手のコーチをしたとのことであるが, 日本女子体育短期大学の教壇に立ったことについては全く言及されていない。

日本女子体育大学は二階堂トクヨ (1880-1941) が代々木山谷に二階堂体操塾を創設してから, 90年を超える歴史を歩んでいる。この間に学生の指導に当たった教師たちの経歴や指導理念等が全く明らかにされていないが, 二階堂学園の歴史や体育の歴史を考える上でも指導に当たった教師らについての研究は意味あることと考えられる。

そこで本稿では, 先ずこれまで不明であったベックマンの日本女子体育短期大学との関わりを明らかにした後, 生涯をスポーツ発展のために貢献したベックマンの足跡を明らかにすることを目的とする。

ベックマンの日本女子体育短期大学との関わりを明らかにするために, 日本女子体育短期大学学長二階堂清寿 (1882-1976) が日々の事項を書き残した日記を主要資料とする。また, ベックマンが女性スポーツのパイオニアとして歩んだ足跡をたどるために, 次の三著書を主要資料として用いる。Louis Mead Tricard (1996) *American women's track and field: A history, 1895 through 1980*, McFarland & Company, Inc. Publishers, Jefferson, North Carolina, and London., は1895 (明治28) 年から約100年間のアメリカ女子陸上競技発展の歴史書である。陸上競技大会に参加した選手の記録やインタビュー等, 多くの情報を得ることができる。Louis Mead Tricard (1936-2008) は11歳の時ニューヨーク市警察陸上競技大会 (NYC PAL) で初めてメダルを獲得してから64歳でニューヨーク マラソンを完走するまで, 長い間ランニングの愛好者であった。また, スポーツ記者 Bob Broeg による, (2000) *The greatest moments in St. Louis sports*, The Missouri Historical Society Press, Saint Louis., および Sharon Kenney Hanson (2004) *The life of Helen Stephens: The Fulton Flash*, Southern Illinois University Press, Carbondale. からは Tricard の著書では扱っていないベックマンについて細かな

情報を得ることができる。以上の三著書を主要資料とし, その他新聞などの記事も参考とする。

2014 (平成26) 年4月ベックマンの業績を保存しているアメリカ陸上競技の殿堂 (National Track and Field Hall of Fame)⁽²⁾を訪問したが, 若いころのベックマンとロビンソン (Elizabeth Robinson, 1911-1999)⁽³⁾が共におさまっている写真1枚が展示されているのみで, ベックマンについてまとめた研究は行われていないことを確認した。そこで本研究では上記の文献を中心に進めることとした(写真2) (写真3) (写真4)。



(写真2) The Armory Foundation 正面玄関
撮影: 筆者



(写真3) The Armory Foundation の三階にある陸上競技場
撮影: 筆者



(写真4) Betty Robinson with Olympic runner and coach Dee Boeckmann, 1920s
Photo: UPI/Bettmann
The Armory Foundation 所蔵

II 本 論

1. 「清寿日記」に記述された「ミス ベックマン」

二階堂清寿の若い頃から晩年に渡る多数の日記帳は二階堂トクヨ関連資料として、日本女子体育大学附属図書館に所蔵されている。これらの日記を、ここでは「清寿日記」と呼ぶ。清寿がトクヨのあとを引き継いでからは、日記の内容は個人の事項のみでなく、むしろ「学校誌」と呼べる記事もある²⁾。ベックマンが日本女子体育短期大学とどのように関わったか「清寿日記」から明らかにする。

1) 1951 (昭和26) 年

「清寿日記」に初めてベックマンの名前が登場したのは「昭和26年4月19日(木) 杉村⁴⁾、林⁵⁾ベックマン交渉」である。二人の学生が講師依頼の交渉にベックマンの勤務先(横浜兵站司令部 スペシャルサービス)に遣わされたと思うが、清寿にベックマンについてどれ程の知識があったのか、また誰かの紹介があったのか、日記にはこの点について全く書かれていない。1951年第1回アジア競技大会の選手だった杉村は、ベックマンとは面識があり、陸上競技の指導が出来る人物として清寿に進言したのであろうと考えられる。

交渉は成立して5月8日(火)から林の通訳でベックマンの講義が始まった。その時、ベックマンはアメリカ駐留軍の「将校」と紹介された。アメリカのスポーツ界で輝かしい業績のある人物だったとの紹介はなく、また将校がなぜ体育を教えられるのかの疑問をもつ者もいなかった。

ベックマンが講義に使用した教科書は出版間もな

かったニクソンとカズンズ共著で大谷武一によって訳出された『体育序説』(同学社 1950年)⁶⁾であった。宿題として次時間の授業内容にあたる部分を通読する課題がだされていたが、入学したばかりの一年生にとって難しい内容で十分な準備が出来ていたとは考えられない。当時の日本では、体育科の研究は全く進んでおらず、従って教科書として採用できる書籍が未だ出版されていなかったため、『体育序説』は短大二年間の唯一の教科書となった。アメリカの大学と比較にならないほど粗末な校舎や運動設備、林以外英語が全く通じないことにベックマンは驚いたことであろう。

5月15日(火)のベックマンの講義について、学生たちに混じって受講した清寿は「科学的 感嘆す。一朝一夕の業^{わざ}にあらず」と記している。ベックマンは学生の質問に明解に答えた。また陸上競技の大会で活躍している学生たちの練習や身体的な問題等に適切なアドバイスをした。講義は5月の毎週月・火・水、ときに土曜日も行われている。教室内の講義ばかりでなく、校庭で陸上競技の実技指導もあった。また、5月29日(火)には八幡山の明治大学グラウンドを借用して陸上競技の指導が行われた(写真5)。

ベックマンが「円盤はこのように持って」と説明をすると、学生たちの好奇の視線は一斉に彼女の真っ赤にマニキュアした指に注がれた。ベックマンはその頃40歳を過ぎていたが、瘦身の体型を保っていた。講義で来校のときはスーツに帽子・ハイヒールという服装



(写真5) ベックマンの講義を受ける二階堂清寿
日本女子体育大学所蔵



(写真6) ベックマンの実技指導風景
日本女子体育大学所蔵

であった。日本はまだ貧しかったので整った服装をしている女性は珍しかった。実技指導のときは、ショートパンツを穿いて、かもしか(羚羊)のような脚をだしていた。当時の体育科女性教師の服装は一般にキュロットスカートまたは白のトレパン(運動用長ズボン)を穿いていたので、ベックマンのスタイルは学生たちにとって新鮮であった。暫くすると、ベックマンは人見絹枝と同じ800メートル走を走った元オリンピック選手だったと、いう話が学生の中に広がっていた。しかし、この大学は人見絹枝の母校であると、ベックマンに話した学生がいたか不明である(写真6)。

以上のようにベックマンの講義は集中的に5月に行われた。「清寿日記」には「5月30日(木) ミス ベックマン 最後の日。記念品、悦に入る」とある。前日に購入しておいたプレゼントを渡している。

『二階堂学園六十年誌』によれば³⁾、トクヨの遺産をめぐって清寿とトクヨの養女二階堂美喜子(1919-1949)の夫二階堂直富との対立があり、1951(昭和26)年度に予定していた講師は全く揃っていないかった。ベックマンの出現は短大の窮地を救った。更に、ベックマンは夏期講習会(7月26日~30日)にも講師として招かれている。講義内容は不明である。7月26日(木)の日記には「ミス ベックマン遅刻一時間。気をもむこと甚だし。遂に来る。林氏通訳」と、180名の受講生を待たせてしまったが講演料¥2,000が支払われ、記念に岐阜提灯を贈っている。

夏期講習会以後ベックマンの来校はないが「読売新聞」(1951年9月17日)によると、オリンピック強化合宿中に病に倒れた杉村へ物心両面のサポートがあっ

た。

2) 1952(昭和27)年

3月3日(月)と5日(水)にベックマンの講演(内容不明)があり、3月7日の卒業式では祝辞を述べている。卒業式以後しばらくの間ベックマンの来校はない。

3) 1953(昭和28)年

ベックマンの来校はない。ベックマンは一カ月間の休暇で10月に郷里のセントルイス市へ帰っている⁴⁾。

4) 1954(昭和29)年

3月13日(土)、17日(土)、24日(土)にベックマンは講義のためでなく、単に大学へ立ち寄ったようである。3月24日の場合は英語の新井教授、菊池教授の通訳で歓談。多分ベックマンに再び講義の依頼をしたのであろう。

秋までベックマンの来校はないが夏の間、病から立ち直った杉村のことで清寿は何か頼みごとがあったようで、新井教授が中に入ってベックマンと電話で話し合いをしている。

「11月30日(火) 午後 ミス ベックマン。てんてこ舞い」また、「12月7日(水) ミス ベックマン 時間割にて気をもむ。英会話 第二教室いっぱい。トレーニング盛況。缶詰め開けて 全く苦しい。目を回すとはこのこと」と、予定していなかった日のベックマンの来校に対する清寿の困惑ぶりがうかがえる。以上のように、1954(昭和29)年は体育理論でなく、英会話が中心の講義であった。

5) 1955(昭和30)年

1月はベックマンの講義は休講。2月15日(火)と3月1日(火)のみ来校、英会話を教えている。休講のときはベックマンから連絡があった様子はなく、清寿と学生たちはベックマンが現れるのを待たされた。さすがに清寿は「2月8日(火) ミス ベックマン来らず。学生に対してすまぬ。どうも外人でも当てにならぬ」、また「2月22日(火) ミス ベックマン来らず 勝手なり」などと書いている。

年度が変わり、6月14日(火)、21日(火)、28日(火)にはベックマンが来校している。6月21日(火)ベックマンは30分遅刻、バドミントンの実技を教えている。この頃バドミントンはレクリエーションスポーツと考えられ、一般にバスケットボールやバレーボールのような運動量のあるスポーツとは考えられていなかった故か、「清寿日記」に「あまり感心せず」と書かれている。

後期に入ってベックマンの講義は休講が続く。11月15日(火)に、突然やって来るベックマンに「ミス ベックマン例によって、てんてこ舞い」と、清寿は振り回されている。11月29日(火)は「ミス ベックマン来る。例のごとく学生少なし、出席の必要ある。社交ダンス マンボ」とある。「マンボ」はこの当時流行していた社交ダンスであったが、学生にとっては初めての経験であった。いつも休講になるので次第に学生たちの出席が悪くなっている。しかし、清寿は「12月13日(火) 気にかかるもの ミス ベックマン来らず。病重さか、先週の無理が悪いのか」とベックマンのことを気にかけている。そして、12月20日(火)にベックマンが来校した際はクリスマスプレゼントとして京都清水焼を贈っている。

1955(昭和30)年からのベックマンの講義が休講になることが多かった理由として、ベックマンと清寿との間に確かな契約が交わされていなかったと考えられる。清寿はベックマンの指導に期待をかけ過ぎていたのに対し、ベックマンには本務があり、また指導は無報酬⁶⁾で行っていた。それ故、ベックマンにとって日本女子体育短期大学で教えることは社会貢献の一つであって、時間があるとき来ればよいと考えていたのではないだろうか。

6) 1956(昭和31)年

1月31日(火)ベックマン来校し、写真撮影が行われた。日本女子体育大学に保管されている写真は、この時撮影されたものである。3月4日(日)の卒業式には来賓としてベックマンは出席している。

7) 1957(昭和32)年

1月10日(木)ベックマンから明日10時に大学へ行くことと連絡が入る。翌日11日(金)には「職員室にストーブ焚き。机の配置 用意万端 十時きたる。一足先に菊池先生来る。メルボルンの写真⁷⁾、着古しの衣類や靴など⁸⁾、日本のお正月料理に大満足。正午ころ横浜行き、菊池先生同行。大成功裏に終了」と、英語科の教授も同席しているのでコミュニケーションのトラブルもなく和やかな新年会であったことが想像できる。

3月3日(日)の卒業式には来賓としてベックマンは招待された。その時感謝状を、また3月12日(火)の終業式には記念品を贈っている。7月6日(土)にはベックマンが帰国のため送別式が10時半より行われ、桐の箱に入った花瓶を贈っている。

8月27日(火)の日記には「今日ベックマンを送る日、朝から手につかない。贈られたワイシャツ、カ

フスボタン、ネクタイ止等々身につけて、時間が早いのに出かけた。横浜についたのは一時間二十分前、ぶらぶらして、漸く小鹿野さん⁹⁾を迎え、タクシーにてノースピアに急ぐ。ミス ベックマンと入口の処にて会い、船室に行き船内を見て、船外に出て待つ、ミスベックマン船側に立つ。紅、青、黄、白のテープが風に靡いて美しい。一時に巨体は静かに、静かに動く、両方にて手を振る。

見える限り、遂に見えなくなった。かくして送る。帰ったのは二時半頃……」と、ベックマンの離日を記しているが行き先は明記されていない。多分、ベックマンは任務を終えてアメリカへ帰国する時であったと思われる。

8) 1958(昭和33)年

昨年8月27日にアメリカへ帰国したベックマンは2月26日(木)に再び来校する。「午後三時よりミスベックマン。三十分遅れて遂に来る。応接にて菊池先生の通訳にてしばし歓談」とある。そして、3月9日(日)の卒業式には来賓として招かれている。この日を最後にベックマンが「清寿日記」に登場することは無くなった。後にベックマンは日本に16年間滞在したと言っている⁶⁾ので1958(昭和33)年以後も数年は滞在したであろう。

以上のように「清寿日記」によると、ベックマンが日本女子体育短期大学に関ったのは1951(昭和26)年5月8日より1958(昭和33)年3月9日までである。アメリカ駐留軍の「将校」と紹介され、体育理論、陸上競技、英会話、レクリエーションスポーツ、社交ダンスなどを教え、また卒業式の来賓として関わっている。そして二階堂清寿学長をはじめ教授や学生たちとの親しい交流があった(写真7)。



(写真7) 学生たちに囲まれた二階堂清寿とベックマン
日本女子体育大学所蔵

2. 女性スポーツのパイオニア ベックマンの足跡

1) 生い立ち

ベックマンはアイルランド系アメリカ人の母親 (Jennie Boeckmann) とドイツ系アメリカ人の父親 (Martine Boeckmann) を両親に3人の子どもの長女としてミズリー州セントルイス市で生まれる。父親は鉱山技師を職業とする裕福な家庭であった。セントルイス市は1904年第3回オリンピック大会が開催された都市で、市民のスポーツに対する関心が高かった。1910(明治43)年にはセントルイス市最初の公立小学校女子児童のプレーデー(Play Day)⁽¹⁰⁾が行われ644人の女子児童が参集した⁷⁾。しかし、この頃のアメリカの家庭では女兒や女性が力を競い合う競技会へ出ることには反対する考え方が伝統的であった。ベックマン家はこの考えに反して、女兒や女性がスポーツをすることを容認している家庭であった。ベックマンは8歳の時に、父親より初めて本格的な走り方を教わり、学校や教会などのプレーデーにはいつも参加して次第に競技者としての才能を伸ばした。

高校卒業後はセントルイスのロレッタ アカデミー (Loretta Academy) の体育教師となり、そのかわり、妹と共にバスケットボールのチームに所属して活躍する。また、陸上競技ではトラック種目のほかに走幅跳や円盤投にも挑戦して1920(大正9)年には陸上競技の10種目にアマチュア競技連盟の公認記録をもっていた。

その頃フランスでは、アリス ミリア (Alice Miliat, 1884-1957)⁽¹¹⁾をリーダーとして、国際オリンピック委員会 (IOC) に対しオリンピックに女子陸上競技種目の導入を強く要求する運動が進められていた。遂に1921(大正10)年国際女子スポーツ連盟 (FSFI=Federation Sportive Feminine International) が結成され、1922(大正11)年にはFSFIが主宰する第1回女子オリンピック大会⁽¹²⁾がフランスのバリで開催されることとなった。ベックマンはアメリカ代表選手として推薦されることを期待していたが選出されなかった。しかし、1927(昭和2)年には50ヤード走で世界記録を破り注目されるようになった⁸⁾。そして、ニュージャージー州ニューアーク市で行われたオリンピック代表選考会(1928(昭和3)年7月4日)にベックマンは自費で参加し⁹⁾、800メートル走に国内新記録を樹立してオリンピック代表選手となった(表1)。

表1 オリンピック代表選考会 800メートル走

順位	選手名	記録
1	Rayma Wilson	2:32 1/5
2	Dee Boeckmann	2:33 4/5
3	Florence McDonald	2:36.0

“American women’s track and field: A history, 1895 through 1980” 参照

2) 第9回オリンピック アムステルダム大会

初めて女子陸上競技5種目が試験的に採用された第9回オリンピック アムステルダム大会で、ベックマンはアメリカ人女性で初めてのオリンピック選手として800メートル走に出場した。しかし、競技出場の3週間前に練習で投げられた砲丸が左腕に当たった事故のため、実力を十分に発揮できず予選で敗退した。決勝進出を果たしたのは国内の予選会で3位だったフローレンス マクドナルド (Florence McDonald, 1909-2008) であった(表2)。

ベックマンは日本の代表選手人見絹枝が走った800メートル走の決勝を観戦していた。ゴールに倒れこんだ選手たちをみて、ベックマンは「極度の疲労というより、むしろ感情的なもの¹⁰⁾だと思った。しかし、オリンピック大会に女子競技種目を導入することに反対するIOCの委員たちにとって、この光景は恰好な理由となり、800メートル走は女子に過酷すぎるということで、1960年ローマ大会で行われるまでオリンピック大会の女子陸上競技種目から除外された。

帰国の途についた際、アメリカ選手団の団長マッカーサーから、選手たち全員にゴールドのグローブがプレゼントされたとベックマンは思い出を語っている¹¹⁾。このアムステルダム大会から、ベックマンはマッ

表2 1928年オリンピック 800メートル走予選 1組の結果

順位	選手名	国名	記録
1	Marie Dollinger	ドイツ	2.22.4 (世界記録)
2	Inga Gentzel	スウェーデン	
3	Fanny Rosenfeld	カナダ	
4	Jeanne Mallon	オランダ	
5	Elisabeth Ostreich	ドイツ	
6	Dee Boeckmann	アメリカ	

“Die geschichte der Olympischen leichtathletik band 1” 参照

カーサーとの長年の交流をもつようになった。

帰国してからはセントルイス市の公職、公共の遊び場等の監督官 (Superintendent of the St. Louis Community Centers and Playgrounds) に就任して、コーチとして、スポーツ選手として活躍した。大学 (Washington University および Harris Teacher's College) で学び卒業はしなかったが多数の単位を取得したと言われているが¹²⁾、多分この時期ではないだろうか。

次のオリンピック、1932年第10回オリンピック ロサンゼルス大会を目指して円盤投に転向を試みるが最上位の記録を獲得できなかった¹³⁾。次第に選手からコーチへ転向するようになったと考えられる。此の頃からベックマンはセントルイス市出身の少女ハリエット ブランド (Harriet Bland, 1915-1991) のコーチをしていた。ハリエットは、1932年オリンピック ロサンゼルス大会にアメリカ代表選手として出場できると自他ともに期待していたが、代表選手として選ばれることはなかった。噂によると、有力者の圧力により他の選手が代表となったという¹⁴⁾。ブランド家はベックマンにハリエットのコーチを特別に依頼して次のオリンピックに備えた。そして1936年オリンピック ベルリン大会で、ハリエットは400メートルリレーチームの一員としてゴールドメダルを獲得した。

ベックマンは1934 (昭和9) 年には女性として初めてのアマチュア アスレチック 協会のバスケットボール部会長 (AAU Sports Committee (Basketball) Chair) のポジションについたのをはじめとして、後に陸上競技、フィールドホッケー、フェンシングの4競技に関わるようになった。

背が高く、ほっそりとした体格(身長173cm, 体重54kg)、さっぱりとした気性、エネルギーに活動を展開するベックマンは、新しい時代の女性として注目された。「New York Post」は「女性の居場所は家庭にあるが、ベックマンはスポーツ界にある」(“Woman's Place May Be in Home, But Dee Boeckmann's Is in Sports”) という見出しでベックマンを紹介している¹⁵⁾。

3) 第11回オリンピック ベルリン大会

1936年第11回オリンピック大会では女性として初めての女子オリンピック選手のコーチ兼シャペロンに就任するが、唯一人の女性役員として、女子選手たちの派遣費や選手選考の公平性について注意を払わねばならなかった¹⁶⁾。

アメリカ国内では、ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) が第11回オリンピック大会をナチスの宣伝に使うことを恐れて、大会をボイコットしようとする動きがあった。ルーズヴェルト大統領 (Franklin Delano Roosevelt, 1933-1945) も大会参加には消極的であった。それにもかかわらず大統領夫人 (Eleanor Roosevelt, 1884-1962) はアメリカ女性オリンピック委員会の名誉会長 (Honorary Chair, National Women's Olympic Committee) として、女子選手のために積極的に寄附集めに関わった。この様なことから、ベックマンはホワイトハウスでの食事や茶会に招待されるファーストレディの友人となったと思われる¹⁷⁾。

アメリカのオリンピック委員会 (AOC) はベックマンを女性初のコーチとして派遣することを大々的に発表した。ベックマンには旅費だけを支給したのみだった。それ故、ベックマンは、記事を書くことで必要な経費をまかなった¹⁸⁾。

この大会では100メートル走でアメリカのスター選手ステューブンス (Helen Stephens, 1918-1994)¹⁹⁾ が優勝し、400メートルリレーでは、強さを誇っていたドイツチームを破り優勝するなどの好成績をのこした。それ故、ベックマンのコーチとしての能力は高く評価された。

ステューブンスが100メートル走で優勝した時、ベックマンとステューブンスはヒトラーの特別観覧室に呼ばれた。ヒトラーはステューブンスの体に触れながら週末に彼の別荘へ誘った。同席したベックマンは、その日は他の予定があると即座に断った¹⁹⁾。このことから、ベックマンは単に優れたコーチであるばかりでなく、良識ある保護者として選手たちに尊敬される存在となった。

帰国後、ベックマンはニューヨークのスポーツライターたちの推薦で女性スポーツ界における有能な人物 (All-Around Sportswomen) の1人に選ばれた。1940 (昭和15) 年には女性としてはじめてのアメリカオリンピック委員会陸上競技部の委員長 (National Olympic Committee (Track and Field) Chair) に、また1941 (昭和16) 年には女性としてはじめてのセントルイス市のレクリエーション監督官 (Superintendent of Recreation for the City) の地位に就いた。

4) 戦中戦後の活躍

レクリエーションの仕事にかかわったことで、ベックマンの活躍の場は更に進展した。女性として初めて

の海外に駐留するアメリカ兵士にレクリエーションを提供する赤十字の理事（Red Cross Recreation Director for the Armed Forces Overseas）として、アイスランドに渡り、駐留するアメリカ兵士たちのためにレクリエーション施設整備にかかわり、またバスケットボールのチームを結成し、男性チームのコーチをした。次に、中国に渡りボクシングリングやバスケットボールのコートを作るなどの仕事に携わった。

戦後、帰国してワシントン D.C.にある大学で、これまでの仕事から得た様々な経験について講義していたが、また新たな仕事、女性初のアメリカ駐留軍にレクリエーション活動を提供する韓国理事（U.S. Army Special Service as a Recreation Director of Korea）に就任して来日した。来日年は明らかでないが、1947（昭和22）年頃ベックマンが日本で陸上競技のコーチをしている写真^{20）}がある。またベックマンのタイトルは「司政官」と紹介されている。それから数年後、日本女子体育短期大学の教壇に立った時ベックマンは「将校」と紹介された。その理由は、間にあった人物の思い込みや間違った翻訳等があったと考えられる。

ベックマンは韓国担当の仕事であったが、朝鮮半島の政情が次第に不穏となったためか、韓国に渡ることはなく日本に留まった。このような政情不安は、1950（昭和25）年6月25日から1953（昭和28）年7月27日の間に起きた朝鮮戦争へとつながった。

日本はその頃、敗戦の厳しい時代を乗り越え、ようやく人々のスポーツに対する関心も高まっていた。1951年第1回アジア競技大会がインドのニューデリーで開催されることとなり、日本も参加できることになった。

ベックマンはマッカーサーの要請によりアメリカ女性として初めて外国の代表チームのコーチに就任して、アジア大会日本代表選手たちが合宿している（1950（昭和25）年12月26日より1951（昭和26）年1月4日）三重県賢島に着任した。

第1回アジア競技大会の日本代表選手槍投の加藤美代子（日本女子体育短期大学1953年卒）によれば、ベックマンからコーチを受けたことはなかった。またベックマンがマッカーサーの要請によるコーチだとは知らなかったという。日本体育協会の記録にはベックマンについての記述はない。ニューデリーではベックマンと選手たちとの親しい交流があった。当時、日本は連合国最高司令官総司令部（GHQ）の占領下であったので、GHQはコーチという名目でベックマンを派遣し

たのではないかと考えられる（写真8）（写真9）（写真10）。

アジア大会終了後間もなくベックマンは日本女子体育短期大学の教壇に立つのであるが、アメリカ側の資料ではこのことについて全く触れていない。ベックマンにとって、日本女子体育短期大学で教えたことは社会貢献の一つであって、経歴の中に置く程重要とは考



（写真8） ニューデリーのベックマン
撮影および提供：加藤美代子



（写真9） 日本女子代表選手たちに囲まれたベックマン
提供：高木美代子



(写真10) インドのネル首相、インデリラ嬢と日本選手団
提供：高木美代子

えていなかったと思われる。

1964年第18回オリンピック 東京大会では「アメリカの選手たちに練習の余暇を有効にすごさせる」²¹⁾仕事 (Activities Director for the US Team) に就任してまた来日している。16年間の滞在経験を生かして、選手たちを伴って都内見学や関西旅行などに行き、離日まで多忙なスケジュールであった。それ故、日本女子体育短期大学を再訪する時間がなかったのであろう。ベックマンは東京オリンピック女子選手村 (現在の国立オリンピック記念青少年総合センター) に滞在していたが、ここはかつて米軍婦人将校宿舎があった場所で、ベックマンが16年間生活していた処でもあった。

1972 (昭和47) 年に公職を退いた後も、ベックマンは走っている若者を見ると、彼らを引き留めコーチしてしまう程²²⁾、陸上競技に情熱を持ち続けていた。これまでの陸上競技界への貢献により1976 (昭和51) 年に National Track and Field Hall of Fame へ殿堂入り、また1977 (昭和52) 年にはミズリー州陸上競技コーチおよびクロスカントリー競技コーチ協会の殿堂 (Missouri Track and Cross Country Coaches Association Hall of Fame) に殿堂入りし²³⁾、彼女の業績は永遠に讃えられている。1989年病気のため女性スポーツのパイオニアは旅立った。

III 考察とまとめ

オリンピックの年 (1904年) に、オリンピック大会主催都市セントルイスで生まれたベックマンは進歩的な家庭に育ち、1928年オリンピック アムステルダム大会にアメリカ女性初の選手として800メートル走に

出場した。しかし、事故による怪我のために記録を残すことが出来なかった。その後、コーチに転向して多くの選手を育てた。また、スポーツ団体のリーダーとして、スポーツの発展につくした。ベックマンが関ったそれらの仕事は女性が初めて就くポジションであった。しかも、戦中戦直後にあっては、ベックマンの仕事の場は海外にまでおよび、男性チームのコーチまで行った。当時の社会通念では、女性は妻として母として家庭の中にあることが当然とされていた時代であったが、ベックマンはスポーツ選手のために、スポーツを愛好する人々のために献身的に働いた。

1928年オリンピック アムステルダム大会に派遣されたアメリカ代表の女子選手は19名であるが、そのうち、National Track and Field Hall of Fame に殿堂入りした選手はベックマンを含めて4名 (Delores Boeckmann 1976 (昭和51) 年, Elizabeth Robinson 1977 (昭和52) 年, Jean Shiley 1993 (平成5) 年, Lillian Copeland 1994 (平成6) 年) である。3名はゴールドメダリストであるが、ベックマンだけは800メートル走の記録すら残すことが出来なかった。それにもかかわらず、ベックマンが殿堂入りできたのは、彼女の陸上競技界への貢献が評価されたためであろう。

ベックマンと日本女子体育短期大学との関わりが本研究によって明らかにすることが出来た。ベックマンは「アメリカ駐留軍の将校」という間違った経歴の紹介であったが、今ここにベックマンはスポーツの使徒であったことを知った。

ベックマンはアメリカ国内をはじめ海外にも活動の場を展開したので、現在収集できた資料だけではベックマンのすべてを明らかにすることは不可能であった。今後も資料収集に心がける必要がある。

謝 辞

この論文作成に穴水恒雄日本女子体育大学名誉教授および平尾智恵子日本女子体育大学名誉教授より多くのご教示を賜り、また高木美代子氏 (旧姓 加藤) より貴重な資料のご提供を受けたことを心より感謝申し上げます。

注

- (1) Delores を略して Dee と呼ばれていた。
- (2) National Track and Field Hall of Fame はニューヨーク市の非営利団体として活動するアーモリー ファ

ンデーション (The Armory Foundation) に所属している。

ここでは青少年のために陸上競技大会の運営、コーチ、学習指導などを行っている。活動資金の多くはボストン市に本社を置くスポーツ シューズメーカーのニューバランス (New Balance) によって支えられている。

- (3) イリノイ州リバデル市に生まれる。1928年オリンピック アムステルダム大会で100メートル走に優勝。アメリカ女子陸上競技界で最初のゴールドメダリストとなる。1932年オリンピック ロサンゼルス大会の代表として期待されていたが飛行機事故 (1931 (昭和6) 年6月) による負傷から再起不能と言われた。しかし、奇跡的な回復を遂げ1936年オリンピック ベルリン大会では400メートルリレーチームの一員として出場、チームを優勝に導いた。1977 (昭和52) 年 National Track and Field Hall of Fame に殿堂入り。
- (4) 杉村清子はこの時2年生に在籍。陸上競技の天才のスター選手で1951 (昭和26) 年3月4日~11日インドのニューデリーで開催された第1回アジア競技大会に出場、100メートルに12.6秒、走り幅跳びに5.91メートルをだして優勝。1952年オリンピック ヘルシンキ大会のホープと期待されていたが、1951 (昭和26) 年9月オリンピック選手強化合宿中に病に倒れ、生死をさ迷う。漸く9か月ぶりに退院して1954 (昭和29) 年に卒業する。選手時代の功績で、1951 (昭和26) 年日本スポーツ賞 (読売新聞社) および朝日スポーツ賞 (朝日新聞社) を受賞。
- (5) 林愛理は当時2年生に在籍。香港からの留学生で英語と日本語に堪能であった。ベックマンの通訳を務める。
- (6) 原著は Eugene W. Nixon, Frederick W. Cozens (1947) An introduction to physical education (3rd ed.), W B Saunders Company, Philadelphia, London.
- (7) ベックマンは1956年第16回オリンピック メルボルン大会に行っていたと思われる。
- (8) 日本はまだ貧しかったのでアメリカの古着や靴のプレゼントは喜ばれた。
- (9) 小鹿野薫 (1957年卒) は日本女子体育短期大学付属二階堂高等学校教諭。
- (10) フィールドデー (Field Day) とも呼ばれていた。学校、教会、コミュニティーなどの行事で「駆けっこ」に出てキャンデーをもらうようなもので、正式な競技会ではない。
- (11) フランスのナント市に生まれる。教師となってロンドンに渡る。1904 (明治37) 年商社勤めのジョセフ ミリヤと結婚。夫の死後フランスに戻り、1917年 (大正6) フランス女子スポーツ連盟を結成。1919 (大正8) 年国際オリンピック委員会 (IOC) に対してオリンピック大会へ女子陸上競技種目の採用を強く求めるが拒否される。1921 (大正10) 年イギリス、フランス、チェコスロバキア、イタリア、スペイン、アメリカの代表とともに国際女子スポーツ連盟 (FSFI) を創設。1922年第1回女子オリンピック大会を開催した。遂に IOC は1928年第9回オリンピック アムステルダム大会に5種目ながら女子陸上競技の採用

- を認めたが、競技種目の拡大には強く反対した。1936 (昭和11) 年国際陸上競技連盟 (IAAF) によって女子陸上競技が統括されると、FSFI は実質的に消滅。彼女自身もスポーツ界から姿を消す。1957 (昭和32) 年パリにて逝去。
- (12) 1922年第1回女子オリンピック大会 (Women's Olympic Games) 参加国はイギリス、アメリカ、フランス、チェコスロバキア、スイスの5ヶ国。65名の選手が参加し、2万人の観衆を集めた。1926年第2回大会からはIOCの申し入れを容認し、オリンピックという名称を使わず国際女子競技大会 (International Women's Games) と改称、スエーデンのイエテボリで開催。日本からは人見絹枝が派遣され個人優勝した。1930年第3回大会はプラハで開催、日本からは人見絹枝ほか6名が参加した。1934年第4回大会はロンドンで開催。眞保正子 (体専1932年卒)、葛尾小秀 (体専1930年卒) ら9名の選手が派遣された。
 - (13) ミズリー州フルトン市に生まれる。子どもの頃から走るのが得意で「フルトンの稲妻」と呼ばれた。18歳の時、1936年オリンピック ベルリン大会で100メートル走に優勝、また400メートルリレーではアンカーとして走り優勝、二つのゴールドメダルを獲得した。1936 (昭和11) 年のもっとも優れたアメリカのスポーツ選手 (Best American Athlete) に選ばれた。その後、プロバスケットボールの選手として活躍する。戦中は海兵隊員として戦地に赴く。1975 (昭和50) 年 National Track and Field Hall of Fame に殿堂入り。ベックマンの愛弟子。ベックマンの National Track and Field Hall of Fame の殿堂入りに貢献した。

引用文献

- 1) USA - Hall of Fame Delores (Dee) Boeckmann, <http://www.usatf.org/HallOfFame/TF/showBio.asp?HOFIDs=17> (2009/05/21)
- 2) 穴水恒雄 (2000) 清寿日記を読む (その1) - 戦時下の体専, 1941-43-, 日本女子体育大学紀要 30巻, p.61, 日本女子体育大学, 東京。
- 3) 二階堂学園 (1981) 二階堂学園六十年誌, p.251, 不昧堂出版, 東京。
- 4) Sharon Kinney Hanson (2004) The life of Helen Stephens: The Fulton Flash, p.186, Southern Illinois University Press, Carbondale.
- 5) 二階堂学園報 (1957年8月15日)。
- 6) 奥山眞 (1988) 東京オリンピック女子選手村, p.31, 国書刊行会, 東京。
- 7) Louis Mead Tricard (1985) American women's track and field: A history, 1895 through 1980, p.14, McFarland & Company, Inc. Publishers, Jefferson, North Carolina, and London.
- 8) 同上 p.147.
- 9) 同上.
- 10) 同上.

- 11) 同上 p.148.
- 12) Bob Broeg (2000) The greatest moments in St. Louis sports, p.54, The Missouri Historical Society Press, Saint Louis.
- 13) 前掲7)p.162.
- 14) 同上 p.233.
- 15) (February 11, 1936) New York Post.
- 16) 前掲4)p.59.
- 17) 前掲12)p.54.
- 18) 前掲4)p.59.
- 19) 前掲7)p.237.
- 20) (1976) 別冊一億人の昭和史 昭和スポーツ史 オリンピック80年, p.118, 毎日新聞社.
- 21) 前掲6)p.31.
- 22) 前掲7)p.148.
- 23) 同上.

参考文献

- 1) リチャード マンデル著 田島直人訳 ナチ・オリン

ピック ベースボールマガジン社 1976年.

- 2) 財団法人日本体育協会 日本体育協会七十五年史 1986年.
- 3) 鈴木良徳 オリンピックと日本スポーツ史 日本体育協会 1952年.
- 4) Ekkehard zur Megede Die Geschichte der Olympischen Leichtathletik Band 1: 1896-1936 Verlag Bartels & Wernitz K G 1970.
- 5) Stephanie Daniels & Anita Tedder 'A Proper Spectacle' Women Olympians 1900-1936 ZeNaNA Press and Walla Walla Press 2000.

(平成27年9月9日受付)
(平成27年12月16日受理)

